



四旬節第5主日 (ヨハネ 11:1-45)

ほどいてやって、行かせなさい

今週の福音朗読は、ラザロのよみがえりについてです。「ラザロの復活」と呼ばないのは、ラザロが永遠に生き続けるわけではないからです。このあと、祭司長たちは、イエスを殺そうとしますが、同時にラザロをも殺そうと謀ったことが書かれています(ヨハネ 12・10)。ラザロのよみがえりの中に、私は四旬節終盤の準備の道を見つけたので、考えてみたいと思います。

ずいぶん前になりますが、誘拐・監禁事件が発生し、およそ9年間、外に出さなかったという事件がありました。ロープで柱に縛り付けたりしていたわけではありませんが、暴力と脅迫を受け、「ここから出られない」という絶望感を植え付けて、誘拐した人をとどめていたようです。実に恐ろしい話ですが、暴力や恐怖心、心理的圧力で、その人を心の牢屋に閉じ込めるということは可能なのかもしれません。

ザアカイは、イエスが到着する前に亡くなっていました。到着する前に亡くなっていたので、疑念を抱く材料がなくなります。つまりその場で何かができなかったのだろうか、その疑問の余地を残さない状況です。ラザロは、イエスによって死者の中からよみがえらせてもらいますから、肉体に縛られ、閉じ込められていたということになります。

イエス様の「ラザロ、出て来なさい」(11・43)はとても力強い言葉です。大声で叫んだからです。まるで、そこにいるすべての人に、人が閉じ込められているもの、人が「出られない」と諦めているものから出てくるようにと、強く促しているかのようです。

あとでも触れようと思いますが、「ラザロ、出て来なさい」ということばが自分たちにも向けられていると気づいたなら、大声で叫ばれたそのことばは、何かに縛られ、身動きできなくなっている人を大いに勇気づけることでしょう。ここからもう出られないのだ、この状態が永遠に続くのだと諦めている人に、イエスは決定的な勇気を与えるのです。

もう一つ、興味深いことばをイエスはおっしゃっています。「ほどいてやって、行かせなさい」(11・44)です。イエス様がほどいてやるわけではありません。人々がほどいてあげます。人々がしなければならぬ役割です。私はこれこそ、今年(2026年)の四旬節終盤、私たちに求められている生き方ではないかと思っています。

イエスは、誰も実行することのできない部分を受け持ってくださいます。人間の死、肉体という牢獄から出てくること、脅迫や暴力、心理的圧迫のため「もはやここから出ることはできない」と、絶望していた人に希望を与える。これはイエス様にしかできない部分です。

一方、「ほどいてやって、行かせなさい」という部分は、イエスの決定的な働きかけのあと、人々に委ねられた部分です。私たちは、絶望の中でイエスから希望を与えられた人の縛りを、ほどいてやって、行かせることができるのです。

二種類の働き、他の言葉で言えば、二重らせん構造になっているそれぞれの働きがあって、ラザロのよみがえりは実現しました。決定的なイエス様の言葉が無ければ、出来事は始まりませんし、出来事に心を開いて協力し、「ほどいてやって、行かせる」働きがなければ、その人を縛っていたものに引きずられたままになってしまうでしょう。

イエス様の決定的な関与は必ず与えられます。重要なのは、私たちにしようと思えばできること、「ほどいてやって、行かせること」のほうです。どこかで、私たちは協力してこなかったのではないでしょう。縛りをかけて、「ほどいてやって、行かせてもいいよ。でもそのあとどうなるか、分かってる？」みたいに、イエス様が介入して決定的な開放をしてくれたのに、私たちが足を引っ張れば出来事は完成しないのです。

「ほどいてやって、行かせること」「自由になったはずの人を、本当に自由にしてあげるために、束縛に使用されていたものをほどいてやって、行かせること」これが、できそうでできなかつたのです。

ある場合しばらくの間、ある場合は何十年も、束縛を利用し続けてきたかもしれない。親子の関係で、または上司と部下の関係で束縛を利用してきたかもしれない。その思いを断ち切り、「ほどいてやって、行かせる」これが、今年のお旬節の、最後の犠牲・捧げ物にしてほしいのです。

縛り付けておくことは、もしかしたら便利で使い勝手が良いかもしれませんが、しかし、イエスが始めたわざ「ラザロ、出て来なさい」を完成させるのは、あなたの「ほどいてやって、いかせなさい」なのです。辛いかもしれませんが、あなたの兄弟ラザロに、もう一度生きる自由を与えてあげてください。イエスの救いの働きを、キリスト者であるあなたが、完成させてください。

受難の主日(マタイ 27:11-54)